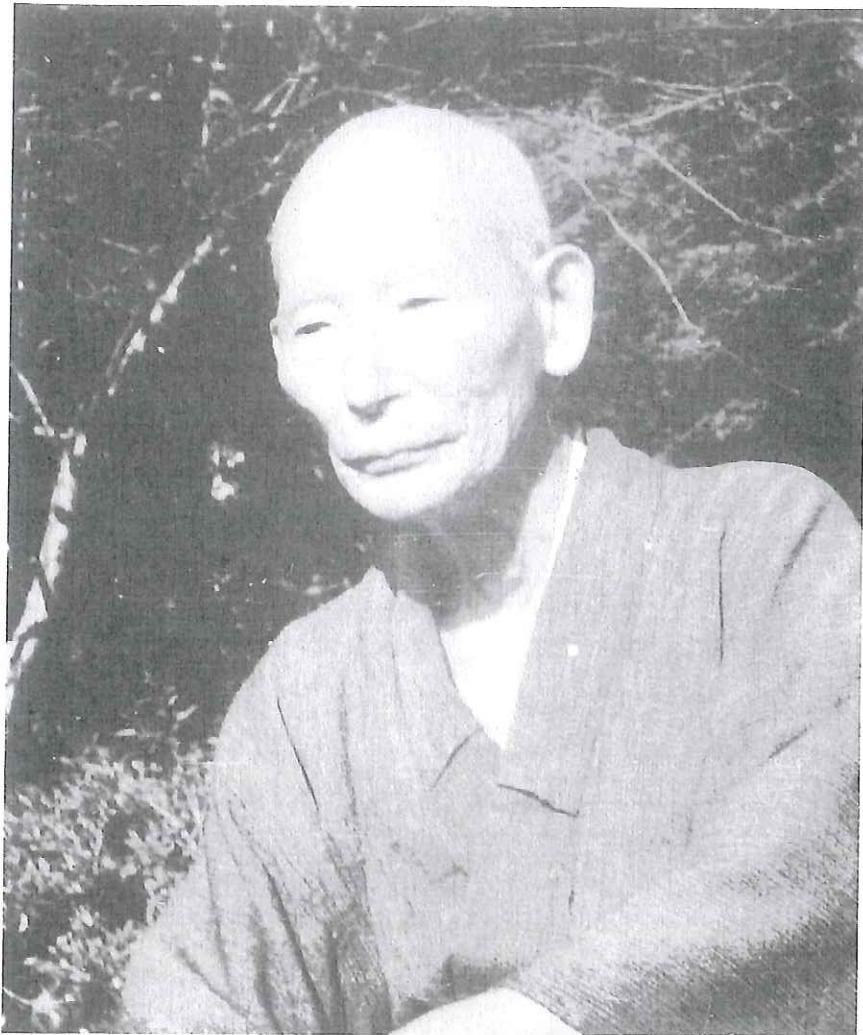


文
獻
資
料
介
紹
第18回

黒葛原兼成翁小伝

山本秀雄



黒葛原兼成翁

最近は郷土誌ブームと叫うのか、屋久島でも歴史や民俗、植物等について聞かれることが多い。先日は島の先覚者について問われたが、泊如竹・岩川与助・柴昌範の三氏については、内容体裁ともに整った伝記があるが、質問の幾人かについてはそれを知らず、答えに窮した。後日の返事を約して別れたがその人は先覚者黒葛原翁の事蹟が埋没しつつあるのはさびしいと、言い残して帰つた。

屋久島の基幹作物中の主産はポンカンである。大正十四年、黒葛原兼成翁（明治元年生～昭和二十六年歿）が台湾からこれを移植し、屋久島を産地化に導いたのであるが、その偉大な恩人を偲ぶよすがと質問に答える小伝を得たので、本誌を借りた次第である。

屋久町は昭和二十八年、黒葛原兼成翁の頌徳碑を建立したが、その折に小伝（孔版）を編集している。以下本文を紹介するが、翁の事蹟は『屋久町誌』（昭和三十九年同町教育委員会発行）にも記載がある。

昭和二十八年十二月

屋久島開発先覚者

黒葛原兼成翁

小伝

熊毛郡下屋久村

黒葛原翁頌徳碑建設委員會

この小冊は、稀有の先哲の略伝を世に汎く頒つて相共にその遺徳を仰がんと欲して誌したものではあるが、忽々の間、資料不充分推敲又足らずに翁の大業を偲ぶには余りにも不備貧弱のそしりを免れないが、他日大成のよすがともなる事を希つて敢えて各位の賢覽を乞うものである。

目次

一、 黒葛原兼成翁略歴
二、 翁の生涯

三、 ポンカンの栽培
四、 亜熱帶植物の栽培

五、 茶の栽培と製茶

六、 数々の業蹟と余聞
七、 頌徳の建碑
八、 寄附名簿

一、 黒葛原兼成翁略歴

鹿児島市池之上町一二六番地に生る

薩摩郡平佐村小学校長を振出しに、

勝目、中飯各小学校長を歴任

熊毛郡下屋久村栗生小学校長、兼ね

終戦後僅々数年の間に日本的な脚光を浴びて先進各地の復興に伍して開発躍進の真只中にある郷土屋久島に、この光輝ある開化の恵をいちはやくもたらしたのは實に、我が先哲故黒葛原兼成先生その人である。

先生は明治の中世下屋久に学校長として三年間を栗生に在職せられしを機縁として、その後約十三年間を外地に送り、再び日露戦役終了後の明治三十八年に下屋久に來り、爾来平内に永住して、一昨昭和二十六年十二月六日、八十三歳の高齢を以てその生涯を閉じられるまで実に前後五十年の久しきに亘る間、その公私生活の一切を抛つて南溟僻遠の離島をして昭和の今日「日本の豊庫屋久島」にまで發展するの偉大なる基盤を樹立せられたのである。

惟うに先生は、はじめ邦家百年の計を教育に求めて薩隅の天地より遠く領有直後の台灣の地に及び、ついで再び下屋久に居住して熊毛開発の曉鐘を打鳴らして政治に携り、終いに屋久島の躍進の根基

て村内全部
島、尾之間、
（中間、湯泊、平内、
麦生、安房、船行）
の小こ

明治二十五年四月
明治十六年より

明治二十五年四月 下屋久村特置嶽南高等小学校長となる
明治二十六年より翌二十七年にかけて、高尾野及伊敷小学校

長歷任

明治二十八年四月台湾に渡り総督府国語学校伝習生となる

明治二十八年四月台湾に渡り総督府国語学校伝習生となる
同年九月より台東地区国語伝習所教諭となる
明治三十二年七月及八月の両回前後百日に亘り蕃丁式百を引

一〇、明治三十六年四月
一一、明治三十八年

休職となり郷里鹿児島に引揚ぐ
下屋久村平内現在地に居住して専ら
かいこん
開墾事業に従事し爾來亞熱帶農產物

一三、大正十四年

台湾よりポンカンを移入奨励して
屋久島ポンカンの魁となす

一三、大正より昭和にかけて、郡会議員並同參事會員當選參回、
議員當選四回、村會

一四、昭和五年

二二、召四二三二用

下屋久村名譽職村長に推挙されて在
職四年

一六、昭和十五年一月

一七、明治、大正、昭和の三代五十年の間、前記の外、椎茸、百合

紀元二千六百年に際して産業功労者として県知事より表彰銀盃をうく

羽の信条

二、一、幾度失敗しても負けるな。
難難汝を玉にする。失敗は神の試練である。



黒葛原翁頌徳碑
下は背面
碑文



根、晩白柚、レモン、オレンジ、温
蜜柑、紅茶等栽培普及につとむ
更に和牛の導入、委託林設定、鰹漁
業組合の設定、電源開発、学区制等
の改廃

久島開発の熱烈なる心意氣を示された次第であると思う。

二、翁の生涯

生いたち

黒葛原兼成翁は、明治元年三月の三日に鹿児島市池之上町一二六番地に呱々の声をあげた。当時天下は明治の新政となり、生日は桃の佳節、生地は由緒深き島津氏の菩提寺福昌寺の近くにあり、生家は竹蔭新な静寂の域であり、代々藩公に仕えた士族のこととて、父兼芳氏、母サキ殿をはじめ此の男の子の他日の成長を期待する所は極めて大きいものであり、幼名を藤太郎と名づけた。

由来池之上町は上町の士族屋敷で、弘蓮学舎に通う稚子達の姿も甲斐甲斐しく、幼にして文武の道に励むを習とした。生れつき英才俊敏の藤太郎少年は長子として両親の愛撫をうくると共に僚友先輩の導きもよろしく、若竹の伸びるが如く成長し名も兼成と改め、大竜小学校を経て当時の俊才の集る鹿児島師範学校へ入学したのである。

人となり

若くして才気喚発したる翁は、近代日本の行末をつらつら惟うに「國家百年の計をたてるには實に人を樹つるに在り」と信じて此の師範学校入となり、教育者を以て他日を期されたものであろう。由来翁は外柔内剛、人に接するに温容己を律するにまさしく峻厳で、熟慮断行積極進取、その信条の示すが如く苦難を乗り越え倒れて後息むの気性は真に男らしきものがあつた。

さればこそ教職にあつても薩隅の地々島々の南北をかけ廻り、他人の望まざる僻遠の地へも易々として任をうけ、更に又勇猛の開拓心は或は領有直後の台湾開発の先駆者となり、後に又実に熊毛否屋

教育者として

明治十九年三月師範学校を卒業するや、その四月、今の川内市、当時の平佐村回天小学校長に任せられ、次いで翌二十年勝目小学校長を経て遠く甑島に渡り、中甑小学校長兼島内全簡易学校長となつた。明治二十三年四月には我が下屋久村栗生小学校長として来任し、同時に村内九力所（中間、湯泊、平内、小島、尾之間、原、麦生、安房、船行）の簡易小学校長をも兼ねて、村内隔なく各地を廻り、しばしば平内をすぎて此の地の風土に心惹かるものがあつたと言う。

超えて二十五年には、島内向学の生徒を育成するため、郡内に魁けて栗生に特置せられた岳南高等小学校の校長ともなり、全村の教育を終始一手に収めたのであつた。されば此の間に、後日下屋久を開発した幾多の卒業生が、翁の若き日の校長時代にその激渾たる薰陶をうけて世に出たのであつた。

かくて翁は屋久島にあること三年、幾多の輝かしい教育業績をのこして再び薩府へ帰り、一十六年には高尾野町小学校長となり、翌二十七年には郷里近くの伊敷小学校長となり、年若くして次第に中心区校長として重きをなして行つたのである。

然るに明治二十八年の春、清國に大勝した我が国は台灣を領有することとなり、茲に新に台灣辺土の統治に剛毅不屈の卓見の先駆者を必要として、教育に於ては広く總督府立國語伝習所生を求めたので、かねて拓南の雄図に燃えた翁は率先之に応募して見事合格のよろこびを見たのであつた。

雄心勃々たる働き盛りの翁の当時の心情察するに余りがある。

台湾に渡つて

明治二十八年台湾に渡り、国語学校に修学すること四ヶ月、同年九月には台東國語伝習所の教諭となり、翌年馬蘭社分教場の勤務となり、鋭意未開辺土の新附の民の教化に力め、併せて蛮域奥地の開發に尽した。

明治三十二年七月に至るや、総督府より、台東から中央山脈を横断して台南に通ずるための新高山麓の所謂高山道路の探検を命ぜられたので、台南社の頭目以下蕃丁二百名を引率して三十三日間の露宿の後、無事その任を果した。

更にその八月には、再び命をうけて鉄道の技師、技手、工夫等多数を案内して、前回同様、頭目以下二百名を引率して七十日に亘る野營露宿の後、見事に測量調査を了えて、其の功を賞せられたのである。

かくして判任官三級となり、愈々台湾開拓の中堅となりつつあつたが、明治三十六年に至つて、感ずる所があつて休職となり鹿児島に引揚げた。

翁は日本領有後間もない台湾の、而も東岸の僻地にあること八年、教職を通じて本島人は勿論當時最も危険視された蕃界にまで出入して之を撫育化するの他、更に道路の開発、鉄道の施設にまで貢献した。その功績は実に国家的に偉大なものがあり、翁の面目躍如たるものがあつたのである。

そして、その後半生、否生涯をかけた屋久島開発の最初の鍵を平内の地に下し、遂に現在地に永住の居を構え、子孫と共に屋久島の人となつたのである。

かくて雄心勃勃々拓化の光をかかげた翁は、専ら開墾殖産を志し、日夜山草履を用いて東西走の活動をはじめ、農家經營は先づ食糧からと、開田一町余、畑地にはポンカンをはじめ亞熱帶植物をとり入れて試作に苦心し、その成功のきざしあるものは近隣は勿論広く村内に奨励したのである。

その間社会的には、豊富な識見と尊い体験溢るる熱情をもつて郡議員に挙げられること三回、殊に参事会員として当選四回に及び、遂に昭和十一年六月には、村民の要望切なるものがあつて名誉職村長に挙げられて在職四年に亘つた。

その後は老軀をひつさげて専ら産業の開発、特に亞熱帶作物の栽培に力を尽し、失敗に屈せず、村民に呼びかけて、以て今日ポンカン、バナナ、茶の如き我が村の一大産業の或は魁をなし、或はその基をなしたのである。

昭和十五年一月十一日、紀元一千六百年祭に当り、時の本県藤野知事は、翁を産業功労者として表彰し銀盃を授与した。

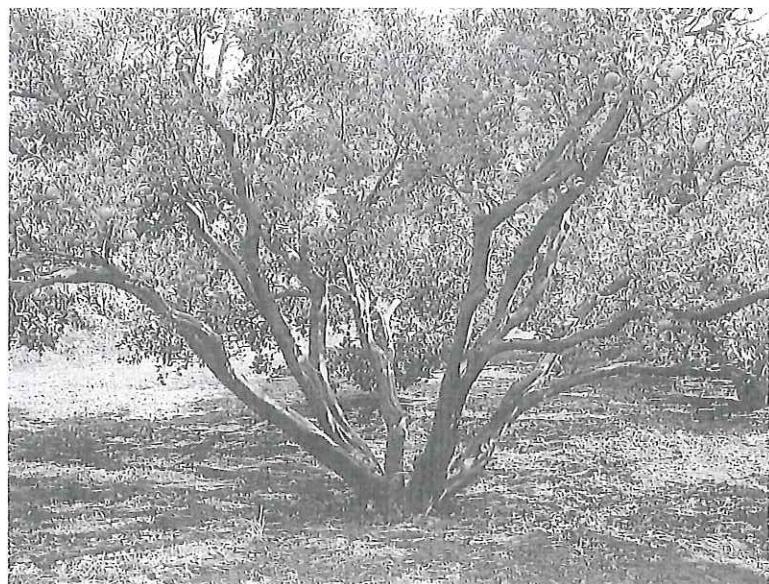
翁は又常に屋久島開発に着し、各種の事業を、或は唱導し、あるいは計画し実施して來たが、今日の屋久電開発その他の事業も夙に翁の先見されしものが多いのである。

かつての教え子をはじめ、翁の德化をふかく慕う者常に去來する中に、翁は老いて益々かくしやく、村民一同その高齢をよろこんでいたのであるが、遂に一昨年即ち昭和二十六年の暮、その熱情をかけて育てたポンカンの実の紅く色づく十二月六日、偉大なその生涯を閉じたのである。

再び屋久島へ——永住の下屋久

台湾より鹿児島へ引揚げた翁は、その後、日露戦争中の二ヵ年を生家に送り、戦塵收まり渡台中の疲れも癒えた明治三十八年の末に、過ぎにし十年前の屋久島時代に夢見た開拓の望みを実現しようと再び来島した。

三、ポンカンの栽培について



四、亜熱帶植物の栽培

さきに明治三十八年、平内に永住の居を定められた翁が、朝の開墾夕の整地にその脳裡を最初に去來したものは、とりもなおさず亜熱帶の数々の特殊作物の栽培であり、就中、バナナ、紅茶とポンカンであった。

ポンカン村長
翁が最初屋久島を訪れた頃は、果実としてはあちこちに紅みかんが見られるだけであつた。この紅みかんの性能、性質が類似している台湾ポンカンに着目された翁は、大正十四年、苗木二百本を取寄せられ、自ら各部落を歩き數本ずつを親木として植付けられた。

風土に適した苗木の発育はよく、その結果も豊かであつた。現在尾之間の岩川イク方宅の庭にある大きな木は、當時翁の植えられた苗木の一本であつて、今も尚その実をたわわにみのらせて居る。その生産品には次の様なエピソードがある。

東京の千疋屋を中心取引が始まるとき、千疋屋の主人、翁の園を視察に来て、将来を約束して帰京した。京浜、京阪地方に出品されたポンカンは、本場産よりも遙かに優秀であるとの好評をうけた。当時の元老西園寺公望公にこれを贈呈すると、甘酸適度の調和を得て真に天下の逸品であると言われたという。

ポンカンの適地適作を確信した本村ではその後はますます栽培普及に努力し、翁が村長就任と共に県費補助によつて更に村営の苗圃を設置して苗木を養成し、村民を指導督励してポンカン村長と呼ばれるようになつた。

今、村においても百町歩栽培を目標にして一大産業にしようとしている。

バナナとパインアップル

温暖多雨で而も一年中降霜を見ない此の土地の亜熱帶的特性を考えた翁は、先づ、先見の地台湾から直接種々の熱帶性の作物の種球を取りよせられた。

翁は、畑地にパインアップルを試み、椎茸材伐採跡地にはバナナを植えつけてその試作を初められた。

特にバナナは村民にも広く奨励して三株宛植付させた。幸に気候に適した苗は順調に育つていつたが、やがて、その秋に訪れた数

年來の台風と黒潮による災害で、殆どそれは見る影を失つたのである。

しかし、翁が村民に奨励されたいくらかの残株は春と共に芽をふき始めた。

今日、本村に於て五〇町歩を目標に奨励増殖されつつあるバナナは、實に此のような由来によるものである。

きな（ケシ）

バナナ、パインアップルの栽培に失敗した翁は、ひるむことなく更に新にキナの栽培に着手したが、不幸にも開花結果期に降雨が多く、之も失敗するに至つた。

晩白柚（パンペイユ＝通称台湾ボンタン）

普通の文旦が殆ど野生のままで順調に発育し、結果する状態を見て、晩白柚の穂を試験場から取寄せて接木したところ、非常に発育がよく、五年後には台灣産に劣らぬ美大なものが結実して各地に於て賞讃をうけた。その他、柑橘類として、レモン、オレンジ類、温州蜜柑等も次々に試作し、相当の成果を収めた。

白百合根

輸出の花形百合は、本村の風土に適する換金作物として、大正五年、本格的に其の栽培を開始して広く村民にも奨励したところ、発育が非常によくて二年後には球根も輸出規格大のものを見るに至つた。そこで、横浜より貿易商を招致して取引しようとしたが、其の際計らずも球根の一部に病菌の附着したものがあり、輸出に不向であるとのことで商談が成立しなかつた。これは全く栽培当初に球根を消毒しなかつたことに原因したのである。

五、茶の栽培と製茶

そもそも人生に潤を与え渴を癒す茶の栽培は、翁がこれまで生活された内地の各地にも或は台灣の地にも何れも盛であり、その生産もゆたかであったのに、當時我が村内には茶樹が極めて少く、その生産は村内の需要量の半分にもみたず、多くは麦茶や草木の葉を茶代用として飲んで居る状態であった。そこで大正の初期、翁は茶種子を大量に移入し、自ら茶園を經營すると共に一般に対しても畦畔植栽を奨励され、村内の需要は勿論、村外にも移出しようと極力督励した結果、村内にも相当の茶園がみられるようになった。

昭和五年、翁は現在の湯泊の温泉の側に製茶機をえつけ、緑茶の製造を開始し、余力は村民の委託製造とし、村内の消費は勿論島外にも多量移出するようになつた。その他に、紅茶適種インドアッサム種等の試作も行つたが、戦争による人手の不足、摘株労力不足、肥料不足等の事情によつて漸次衰えた。現在、湯泊温泉近くのコンクリートのあとは、当時の製茶工場のあとであり、翁は積出を考えて海岸近くに造築されたものといわれている。

扱て、海岸に据付けた製茶工場を津波のためさらわれ、非常な經濟的打撃を受けたが、「堅忍不拔」の翁の信念は、位置を茶園近くに変更して再び製茶工場を建設したが、神のいたずらか或は又試練か、その年の秋、台風のため倒壊した。二度と立上る事の出来ない程の打撃であったが、翁は「幾度失敗しても敗けるな、失敗は神の試練である」を處世訓として居られたので、石にかじりついても工場の復興をしようと努力した。恰もその時、台風被害に対しては村に救済の低利資金の貸出があることを知つて、七千円の借入を申込んだところが、村会においては懸念の余り委員三名を選任して資本

調査をして、財産担保に貸出す事にして工場は三度建設された。其の後台風被害情況調査の為再び村委会から视察したが、ポンカンの結実状態が極めて立派であることを見て、今まで翁を見る眼の間違であったことをなげき、補助でも出すべきであったと申しあわせ、議会に報告したのである。

六、数々の業蹟と余聞

椎茸栽培

翁は山野に自然に発生する椎茸にヒントを得て、自己の所有地内に多くの原木が密生しているのを知つて之を人工的に栽培すれば有利であろうと、大々的に原木の伏込をし、更に乾燥場を設置して大量生産をなして、特に大正初期はかなりの成果を収めた。

和牛の導入使役

翁の入村当時は島内に一頭の和牛もなく、農耕は専ら人力に依り貧弱な農機具を用いて遅々とした經營をしていたので、畜力を利用する進歩的経営に切換ねばと懇々内地から和牛十頭を導入した。これらの牛は或は放牧し或は舍飼して、畜力の利用と自給肥料の生産につとめ、その普及をはかつた。今日無家畜農家の改消が叫ばれているが、翁は實に明治の末期にすでに実施して村民にその範を垂れたのである。

委託林の設定

林野引戻し行政訴訟の失敗の後、村当局に協力して翁は自ら鹿児島大林区署は勿論遠く東京本省まで運動して、ついに屋久島全村に六千町歩の委託林を設定した。これにより、島民は自由に山を開拓

し、疲弊の本村に少からぬ潤を与えた。

栗生の鮫漁業

元年、栗生鮫漁業組合発足に当たり資金の導入を一任されて、農銀頭取り折田氏に交渉の結果組合の要望通り資金を借りて機帆船を建造し、本村漁業の振興に大いに寄与した。

学区制の改廃

本村には尋常小学校一、高等科併設校が二校あり、地理的、財政的、且又機会均等の面から、高等科併設の四校区に改廃することが年來の懸案であつたが、翁の努力により速急に解決するの喜びをみた。

電源開発

屋久島の河川水量に着眼した翁は、安房川上流に一千尺の落差をもつ発電を計画して、明治の末期、交友である鹿児島電氣社長の来島視察を経て資本金三千万円の画策中、大正初期の不景気に遭遇して頓座したのであるが、今日の屋久島電源開発は實に当時の翁の計画が実現したものに外ならない。

頌徳の建碑

翁は世にあること八十三年、その下屋久に於ける五十年の生活は、略歴の示すが如く春風秋雨只之島地の開發にあつて、その業蹟の数々は今更枚挙に暇がないが、我等村民一同は茲にこそ翁の遺徳を偲び其の偉業を心から感謝する為、翁の旧居のほとり頌徳の碑を建てて、子孫と共に感謝の誠を捧ぐる次第である。